

【特集：2020年度 JAMS 研究大会  
ラウンドテーブル「Wawasan2020 とマレーシア社会の変化：複眼的視座からの検証」  
2020年12月5日（オンライン開催）】

## 特集にあたって

穴沢 眞

2020年は、マレーシアにとって、大きな変化の年でした。2月から3月にかけての政変により、希望連盟（Pakatan Harapan）政府が瓦解し、新たな与党連合（Perikatan Nasional）が成立しました。新政権誕生からほどなくして、スリ・プタリン・モスクにおける新型コロナウイルスのクラスターを発端とする大規模な感染状況が明らかになり、マレーシアは約1ヶ月半にわたり移動制限命令（MCO）のもとにおかれました。MCOのもと、効果的な保健行政によって感染状況は一時的にコントロールされましたが、9月末に行われたサバ州選挙を契機に、国内の感染は再び拡大へと向かい、年明けには再びMCOが施行されました。経済的なインパクトは大きく、第二四半期のGDP成長率はマイナス17.1%まで落ち込み、年率でもマイナス5.6%と、アジア通貨危機以降最低の成長率となりました。

奇しくも2020年は、「Wawasan2020」や「2020年までの高所得国家入り」といったマレーシアの長期国家目標の最終年でもありました。研究大会では、マレーシアの政治、社会、経済がこの30年間でどのように変容したのか、2020年の公衆衛生、経済、民主制の危機を経て、これから先どこに向かっていくのかを、様々な分野のマレーシア研究者がともに議論する機会として、ラウンドテーブル「Wawasan2020 とマレーシア社会の変化：複眼的視座からの検証」を開催し、世代を超えた研究者による活発な議論が行われました。

このたび、JAMSとしての学際的な研究を進めるきっかけづくりとして、また、当日ご参加いただけなかった会員の方々への情報提供を目的として、ラウンドテーブルの報告者や討論者の同意を得て、議論の内容を会誌に掲載することになりました。これを機に、学会の発展、とりわけ若手研究者が機会を得、彼らの活力がいかに発揮される学会作りが進むことを願っています。

## 第一部：経済、政治とマレー人社会からみた Wawasan 2020 の時代

穴沢真会員：

モデレーターを務めます小樽商科大学の穴沢です。今年から JAMS の会長を務めています。私は経済の専門家としてマレーシアを見てきました。本日のテーマである Wawasan2020 について、経済学者は 2020 年までに先進国入りするという点に注目してきました。しかし、マハティール氏が述べた Wawasan2020 は経済だけでなく、社会全体、国全体の将来を標榜したものといえます。ある意味、ルックイーストにも通じるような、西洋とは異なる社会を形成するという基本的な考え方も言外に滲ませているのではないかと思います。

Wawasan2020 はマハティール氏という稀代の政治家が残した1つの遺産であると思います。私自身はこの 2020 年の時点でマハティール氏がまだ現役にいるということは考えておりませんでした。彼は将来像のみを提示して引退してしまっていると思っておりましたが、持ち前のしぶとさで、2020 年の時点で、今でもまだ現役で、しかも首相として活躍していることに驚愕しています。まさに人生 100 年時代を代表するような方といえます。

Wawasan2020 は、少し歴史を遡りますと、1970 年代から始まった新経済政策、そしてブミプトラ政策などある意味、主にマレー人の各分野での地位の向上の延長線上にあるのではないかと思います。1991 年に公表された Wawasan2020 ですが、ISIS（国際戦略研究所）の所長（当時）、ノルディン・ソピー氏が原案を作成し、それをマハティール氏が採用したものであります。30 年という長いタイムスパンのビジョンは世界的に見ても珍しいのではないかと思います。本日はラウンドテーブルの形式で様々な分野の方からお話をうかがいたいと思います。

さらに今回、大会全体を通じて若い方々に発言していただきたい、また、報告していただきたいと思い、それにあわせて人選も進めました。JAMS として、また、会長として、若手研究者の育成を念頭に置いた研究大会を標榜し、理事の先生方にもご協力をいただきました。

話題提供の第 1 部では、「経済、政治とマレー人社会からみた Wawasan2020 の時代」というテーマで 3 名の方々に順次報告をしていただきます。